

W・E・B・デュボイスの生涯と時代

—日本訪問（1936年）に関わる試論—

古 川 哲 史

はじめに	3
デュボイスの生涯概観	5
デュボイスの日本訪問（1936年）	12
おわりに	20
註	25
付属資料1：デュボイスの主要著作 （単行本、刊行年順）	34
付属資料2：デュボイス著作の日本語翻訳書 （刊行年順）	36
付属資料3：デュボイス関連図版	40

だから、わたしは、あなたに祈る、わたしの小さな書物を、あらんかぎりの寛大さをもって受けとられんことを。そして、わたしの言葉をわたしとともに研究し、わたしの内部にある信念と情熱に由来する誤りや弱点をゆるし、ここに隠されている真理の穀粒をさがしもとめられんことを。
 (W・E・B・デュボイス『黒人のたましい』、1903年)¹⁾

はじめに

アメリカ合衆国ニューイングランドのマサチューセッツ州に生まれ、最晩年には西アフリカの独立後間もないガーナで市民権を得て、ガーナ市民として亡くなり、ンクルマ大統領によって国葬にされたウィリアム・エドワード・バーガート・デュボイス (William Edward Burghardt Du Bois: 1868年—1963年) ——本論考は「近代黒人解放運動の父」と呼ばれるW・E・B・デュボイスの1936年(昭和11年)の日本訪問を中心に論じるものである。そして、しばしば親日家として言及されるデュボイスにとっての「日本」とは何であったのか、さらには訪日を含めたデュボイスの生涯およびデュボイス研究の現代的、世界史的意味を考える試論としたい。²⁾

W・E・B・デュボイス [付属資料3: 図1] の80年近くにわたる公私の活動あるいはその著作の全体像を捉えることは容易ではない。デュボイスは、学者として歴史学や社会学をはじめ人文・社会諸科学の分野にわたり数多くの著作 [付属資料1] を残し、それに加えて小説や詩も刊行し、広汎で国際的な社会活動をした。それらを繋げて(あるいはそこに見られる断絶を) 描くことに困難さが伴うのである。³⁾ 一方で、デュボイスの代表的な著作『黒人のたましい』(The Souls of Black Folk, 1903)などは、今もなおアメリカやア

4 W・E・B・デュボイスの生涯と時代（古川）

リカ諸国だけでなく、多くの国や地域で人びとに読まれ続けている。アメリカではデュボイスに関する研究書は多いが、プリンストン大学で哲学を学び、ハーバード大学で教え、現在はユニオン神学校で学問とともに人種差別など社会問題に取り組む学者かつ活動家のコーネル・ウエスト（Cornel West）は、近著（2014年刊）で次のように語っている。

わたしたちはW・E・B・デュボイスの物事を扱う許容量の大きさや視野の広さ、深さを十分に把握できるところにまだ達していないのかもしれない。デュボイスは学者、公の場で活躍した知識人、活動家であり、資本主義や階級制度を鋭く批評し、またその階級制度が白人優越主義や人種差別制度と密接に関連していることを見通していました。それゆえに、わたしたちは自分たちの理解、とくにポスト・アメリカの世界、つまりアメリカ帝国がもはや中心にない世界についての理解を深めるのに、デュボイスがどれほど参考になるかをようやく実感し始めたと思っています⁴⁾。

日本でもデュボイス自身による著作の翻訳書〔付属資料2〕はあり、歴史学や社会学、文学の分野などで、デュボイスについて本格的に取り組んだ論文もある。しかしながら、まだ取り上げられていないデュボイスの活動や著作⁵⁾、後世への影響など、デュボイスに関わるテーマは多い。本稿は、デュボイスの生きた時代状況を意識しつつ、まずデュボイスの生涯を時系列で概観し、その後で訪日を取り上げる。最後に〈付属資料〉として、デュボイスの「主要著作」、日本（語）におけるデュボイス紹介あるいは関心の有り様が窺える「日本語訳書」一覧、そして「関連図版」をつけた。

デュボイスの生涯概観

95歳まで知識人として生きたデュボイスの活動は多彩であり、生涯を区分するのは難しいが、本稿では時系列に「初期」「中期」「後期」「晩年期」と4つに分けてみたい。「初期」（1868年—1894年）はハーバード大学大学院を修了し、大学教員になるまでである。

1868年2月23日、デュボイスは合衆国北部ニューイングランドのマサチューセッツ州グレートバリントンに生まれた（日本では明治維新の年である）。アメリカでは1865年の憲法修正第13条によりようやく奴隷制が廃止されたが、南部を中心に、まだ人種差別は日常生活でも公的な場面でも、深く根付いていた時期である。

デュボイスの父アルフレッド・デュボイス（Alfred Du Bois）は、フランスのユグノー教徒の子孫であり黒人の血を引いており、母メアリー・バーガート（Mary Burghardt）もまたオランダ系と黒人の血を引く女性であった。父はデュボイスが生まれてから1年も経たないうちに家を出て行ってしまい、生涯、二人は会うことはなかった。グレートバリントンでは、母子家庭ではあったが教育に熱心な母親により、デュボイスは教会や学校に通う数少ない黒人の一人であった。住民は白人が主で黒人は少なかったが、南部のようなあからさまな人種差別は僅かであった。

デュボイスは幼い頃から学力に秀で、高校生の時にすでに新聞に寄稿し始めている。1885年、17歳の時に、教会関連の奨学金を受け、南部テネシー州のナッシュビルにある「黒人大学」のフィスク大学（1865年創設）に入学する。奴隷制を廃止するのに国を二分する大規模な内戦（The Civil War／南北戦争のこと。1861年—1865年）を必要としたアメリカでは、とりわけ南部諸州

では、人種差別は「日常の出来事」として根強く残った。ナッシュビルでデュボイスは初めて深刻な人種差別に直面し、自身を「黒人」として強く意識するようになった。

フィスク大学を卒業後は、かねてより願っていたハーバード大学に進むことが決まり、同大学の3年生に編入学している。ハーバード大学では卒業記念の演説者6人のうちの一人に選ばれるほど優秀であった。その後は同大学大学院に進み、アメリカの大西洋奴隷貿易禁止の政治的かつ倫理的失敗を扱った博士論文を執筆し、1892年にはドイツのベルリンにあるフリードリッヒ・ヴィルヘルム大学へ2年間留学する機会を得ている。休暇中にはヨーロッパ各地を旅行し、自らの視野を広げていった。⁶⁾

「中期」（1894年—1919年）は、1894年にドイツから帰国後、オハイオ州にある「黒人大学」のウィルバーフォース大学で最初の教員生活を始めた時期から第一次世界大戦期までである。大学講師としてラテン語やギリシア語などを教えながら、歴史学および社会学の分野で研究を深めている。その一方で、社会活動を国際的な舞台にまで展開していく時期でもあった。1895年にはハーバード大学から黒人として初めて博士号を取得し、その論文が翌1896年に〈ハーバード歴史叢書〉の第1巻『アメリカ合衆国におけるアフリカ人奴隷貿易の制圧 1638年—1870年』（*The Suppression of the African Slave-Trade to United States of America, 1638-1870*）として出版された。この年、ウィルバーフォース大学の学生であったニナ・ゴーマー（Nina Gomer：1871年—1950年）と結婚している。ペンシルベニア大学から、フィラデルフィアの黒人コミュニティの社会調査を依頼されたのもこの年である。ウィルバーフォース大学からペンシルベニア大学に移り、その社会学的研究成果は、1899年に『フィラデルフィアの黒人——社会学的研究』（*The Philadelphia Negro, A Social Study*）としてペンシルベニア大学から出版された。

1897年には南部の「黒人大学」であるアトランタ大学の教授となり、歴史学や社会学を教えている。息子バーガート・ゴーマー・デュボイス (Burghardt Gomer Du Bois) が生まれるが、幼くして死去する (18カ月) というつらい体験もあった。日常生活では、人種隔離された公共施設の利用を拒否することで人種差別反対の意思を示している。1900年には、英領トリニダード出身の弁護士ヘンリー・シルベスター＝ウィリアムズ (Henry Sylvester-Williams : 1869年—1911年) によりロンドンで開催されたパン・アフリカ会議 (The Pan-African Conference) ⁷⁾ に参加した。また、この年に娘ニナ・ヨーランド (Nina Yolande) が生まれている。

1903年には、刊行当初から多大な影響を与え、黒人論の「古典」として現在まで読み継がれている『黒人のたましい』 (*The Souls of Black Folk*) が出版された。本書は、版によっては副題「エッセイとスケッチ」 (*Essays and Sketches*) がつけられているが、アメリカ人であることと黒人であることの分裂した自己意識である「二重意識」 (“double consciousness”) と名づけられた問題や、「20世紀の問題は皮膚の色による境界線の問題、——すなわちアジア、アフリカ、アメリカ、海洋諸島における色の黒い人種と色の白い人種との間の関係である」⁸⁾ というグローバルな視座からの予言的な言葉とともに、広く読まれてきた。何より、本書のタイトルが示すように、黒人も白人同様に人間としての「ソウル」があるのだという宣言であった。

この時期、もう一人の著名な黒人活動家としてブッカー・T・ワシントン (Booker T. Washington : 1856年—1915年) がいた。新進気鋭の学者デュボイスは、初めはワシントンに敬意を払っていたが、後にワシントンの白人との融和を前面に出す考えや実践方法に異を唱えながら、指導的な黒人を育成する「才能ある一割の黒人」 (“The Talented Tenth”) の思想を練り上げる。1905年には、ナイアガラ近くにデュボイスはじめ黒人知識人が集まり「ナイ

アガラ運動」を組織している。しかし、この運動は資金難や内部対立で解消となり、1910年、デュボイスは全米黒人地位向上協会（NAACP：National Association for the Advancement of Colored People）の設立に参画することになる。そして、アトランタ大学を退職し、同協会の機関紙『クライシス』（*The Crisis* 『危機』）の発刊と編集に携わるなど、学問とともに黒人解放運動のための啓蒙活動、女性の市民権の確立も含めた広範囲な社会運動を行っていった。

1911年には、ドイツ留学時に社会主義に触れて以降、その主義と運動に強い関心を持ち、僅か1年程であったがアメリカ社会党に入党している。1917年はロシア革命の年であり、デュボイスが関心を寄せた社会主義国家が初めて誕生した。第一次世界大戦では、平和追求の立場を唱えつつも、アメリカ黒人の国や社会への貢献を示し地位向上と雇用拡大に役立つとして、黒人の参戦に肯定的立場をとった。

1919年には、デュボイスは黒人問題はアメリカ国内だけでなく、世界に散らばるアフリカ系の人びと、アフリカン・ディアスポラの問題であるという意識から、第一次世界大戦後のパリで第1回のパン・アフリカ会議（The Pan-African Congress）を主宰している。また、第一次大戦後のパリ講和会議の国際連盟委員会においては、日本が人種差別撤廃案を提案し、デュボイスも支持を表明した。しかしその試みは、最終的には欧米諸国の反対などで廃案になった。

「後期」（1919年—1945年）は、第一次世界大戦後から第二次世界大戦終了までの活動である。1920年に自伝的な『ダークウォーター』（*Dark Water*）を刊行し、1921年には第2回パン・アフリカ会議（ロンドン、ブリュッセル、パリ）、1923年には第3回パン・アフリカ会議（ロンドン、パリ、リスボン）、1927年には第4回のパン・アフリカ会議（ニューヨーク）が開催された。デ

デュボイスにとってこの時期は外国へ行く機会が増え、1923年には、リベリア大統領の就任式にアメリカから全権特使として列席、初めてアフリカ大陸に足を踏み入れている。1926年には、かねてより強く望んでいたソビエト社会主義共和国連邦を訪れた。ソ連ではひと月程の滞在であったが、好印象を持って帰国している。1928年には、アジアやアフリカにおける植民地主義からの解放をテーマにした小説『黒い王女』（*Dark Princess*）を発表した。

1931年、全米黒人地位向上協会の書記長を長年務めてきたジェームズ・ウエルドン・ジョンソン（James Weldon Johnson：1871年—1938年）が退き、ウォルター・ホワイト（Walter White：1893年—1955年）がその地位に就いた。その後、デュボイスは組織運営を巡ってホワイトをはじめ理事会と対立することが多くなり、1934年には、全米黒人地位向上協会を脱退し、アトランタ大学に社会学部長として復帰している。1935年には大著『米国の黒人による再建』（*Black Reconstruction in America*）を刊行した。1936年には、米国とドイツ語圏の国との文化交流を促すオーベルランダー・トラストの援助で、ドイツ・オーストリアの教育制度や産業発展の視察に出向いたが、デュボイスはこの機会を利用してイギリス、フランス、ベルギー、オーストリアを経て、ドイツに5カ月間滞在している。その後、ポーランドを經由してソビエト連邦に入り、シベリア大陸を横断して、日本統治下の満洲、中国経由で、2週間日本に滞在、ハワイ経由で帰国した。5カ月滞在したドイツでは、ヒトラーのナチ政権下で開催されたベルリン・オリンピック開催前の慌ただしい雰囲気とともに、ユダヤ人迫害などの実態を観察している⁹⁾。

1940年には、自伝的な内容の『夜明けの薄闇』（*Dusk of Dawn*）を出版した。翌1941年にはアメリカの第二次世界大戦への参戦があり、デュボイスはとくに日本が白人帝国主義者と闘っているとして、日本に共感を寄せる。アトランタ大学では、デュボイスの思想や人種差別のない世界を求める記事が

社会主義的で「偏向」しているとして、大学を退職せざるを得ない状況が生まれる。とりわけ日米開戦後も親日的な発言をし記事を書くデュボイスは危険分子とされた。連邦政府の支援を受けなければ大学は経営危機に陥ることも背景にあった。その結果、デュボイスは1944年、76歳の時にアトランタ大学を退職し、再度、全米黒人地位向上協会に復帰することになる。1945年4月には、2カ月間にわたるサンフランシスコ会議に出席し、人種差別や植民地主義の撤廃を求めた。同年、イギリスのマンチェスターで開催された第5回パン・アフリカ会議にも出席している。そこでは、アフリカ諸国の独立を目指す多くのアフリカ人指導者たちに、「パン・アフリカ運動の父」としてもてなされた。

「晩年期」（1946年—1963年）は、70歳半ばでなお精力的なデュボイスの、第二次大戦後からガーナで死去するまでの期間である。1947年には、アフリカが世界に果たした役割を論じた『世界とアフリカ』（*The World and Africa*）を刊行している。一方、全米黒人地位向上協会では、実質的な権限をもつ書記長のウォルター・ホワイトや理事との再度の対立、組織の非民主主義的運営への批判などにより、1948年には協会側から「罷免」されることとなった。

1950年には、デュボイスは、歌手で俳優、社会運動家のポール・ロブソン（Paul Robeson：1898年—1976年）らと核兵器廃絶等を目指した平和情報センター（Peace Information Center）を設立、議長に就任した。しかし、政府のマッカーシズム、反共産主義によって83歳のデュボイスは逮捕され、起訴された。1週間後に保釈金を支払うことで釈放されている。この年、半世紀にわたり連れ添った妻ニナ・ゴーマーが死去した。翌年、デュボイスは、作家で社会活動家でもあったシャーリー・グレーム（Shiley Graham：1896年—¹⁰1977年）と再婚している。1952年には国務省が社会主義者としてデュボイス

の旅券発行を拒否し、1955年のインドネシアでのアジア・アフリカ会議（バンドン会議）への出席、1956年の中華人民共和国からの招待、1957年のイギリスからのガーナ独立式典への招きなどには、すべて応じることができなかった。1958年ようやく最高裁判所の判断で旅券が発行され、翌年には妻グレアムと一緒に約1年間にわたる長旅に出た。ソビエト連邦には5カ月間、中国には8週間滞在した。ソ連ではフルシチョフ首相と会談し、アフリカ研究所の設立を助言し、実現させている。中国では毛沢東国家主席や周恩来首相と会談し、社会主義の建設に励む都市や農村を見学し、国を挙げての対応に感謝している。[付属資料3：図6]

「アフリカの年」と言われる1960年、デュボイスはガーナの共和制移行を祝う首都アクラでの式典に、かねてより親交のあったガーナの初代大統領で「アフリカ独立の父」と呼ばれるクワメ・ンクルマ（Kwame Nkrumah：1909年—1972年¹¹⁾）の招きで出席した。翌1961年には、再びンクルマの要請もあり、アフリカおよびアフリカ系世界を扱った『アフリカーナ百科事典』（*Encyclopedia Africana*）編纂のため、ガーナに妻と再訪することを決める。さらには、自身の逮捕に見られる社会主義や共産主義に関連するヒステリックなまでのアメリカ政府の対応に絶望感を抱いていたデュボイスは、アメリカ共産党に入党を申請し、黨員としては活動しないまま、アメリカから逃れるように、ただちにガーナの首都アクラへ向かった。アクラではデュボイスが予想していた以上のもてなしを受けた。（現在、自宅はThe W. E. B. Du Bois Memorial Centre for Pan-African Cultureとして記念館となっている。[付属資料3：図7、図8]）デュボイスはもはや共産黨員であり、合衆国に戻れば司法の裁きが予想された。それゆえ、1963年にはガーナの市民権を獲得し、ガーナを終の棲家と決めたようである。その年の8月27日——アメリカではワシントン大行進の前日——首都アクラの自宅でデュボイスは95歳で死去し

たのであった。晩年のデュボイスはもはや全米黒人地位向上協会と立場は異なっていたが、ワシントン大行進では、その死が同会の指導者ロイ・ウィルキンス（Roy Wilkins：1901年—1981年）によって参加者に伝えられ、黙禱がささげられた。

ガーナではデュボイスの葬儀は、ンクルマ大統領によって国葬扱いとされ、8月29日に執り行われた。妻のシャーリーは「アクラにあるすべての大使館から追悼のメッセージを受け取りました。アメリカ以外は」¹²⁾と語っている。ンクルマが出席した葬儀では、デュボイスの遺体を入れた棺が、パンアフリカン・カラーの赤、黄／金、緑（それぞれ、独立運動で流された血、豊富な資源と繁栄、豊かな自然を示す）に、黒い星（アフリカの独立、自由を象徴）を真ん中に配置したガーナ旗に包まれ、埋葬された。

このようにデュボイスが生きた時代は、二つの大戦を含んだ世界史の激動の時期であった。一方、デュボイスが強く意識するようになった「有色人種の盟主」日本では、明治維新から第二次世界大戦での敗戦、占領期、その後の経済の高度成長期にあたっている。デュボイスの死去は、日本の新聞でも「デュボイス氏死去 黒人解放の先駆」として略歴とともに短く報じられた。¹³⁾

デュボイスの日本訪問（1936年）¹⁴⁾

「近代黒人解放運動の父」とされるデュボイスは、95年にわたる生涯の間に、上記でも触れたように、ドイツ留学をはじめ、自身が主唱したパン・アフリカ会議への出席など、数多く外国への旅をした。とはいえ、デュボイスが、有色人種の国で産業発展を成し遂げ、日露戦争ではロシアに「勝利」したことに好印象を持っていた日本を訪れたのは、一度だけであった。全米黒人地位向上協会から脱退し、アトランタ大学に復帰していたデュボイスは、

1936年6月から7カ月に及ぶ旅行に出た。この世界旅行の経費は、先述したように、主にオーベルランダー・トラストが負担し、デュボイスにドイツとオーストリアの学校制度や産業発展の調査をさせる目的であった。しかし、デュボイスは世界史における危機的な状況を感じ取り、ヨーロッパやアジアを自らの眼で見る良い機会ととらえ、イギリス、フランス、ベルギー、オーストリアを経て、ドイツに5カ月滞在する。その後、ポーランドを經由しソビエト連邦を訪れる。そこからシベリアを横断し、実質的には日本統治下の満洲国、中華民国を経て、長崎に船で到着する。12月の来日時、デュボイスは68歳であった。8月には早くも「白人打倒の講演に 黒人の父 来る！」として、『東京朝日新聞』がデュボイスの来日を紹介していた。「スポーツ制覇の誇りを抱き」とベルリン・オリンピックで活躍したジェシー・オーエンズなどの名前も挙げている。[付属資料3：図2]

満洲ではデュボイスは、かつて国際連盟脱退の際の日本代表を務め、当時
は南満洲鉄道（満鉄）総裁だった松岡洋右と会見した。会見ではデュボイス
は、満洲国を関東軍による傀儡国家ではなく、実質的には満鉄が創造した国家
であり、反資本主義の帝国と見ていたようである。大連では「人種差別」¹⁵⁾
について300人の聴衆に講演をしている。日露戦争の激戦地となった旅順な
ども訪れた。その後、中国では北京、上海を見学したのち、日本訪問となる。
日本船の上海丸で長崎に到着したのが1936年（昭和11年）12月2日であり、
17日に横浜から龍田丸でハワイのホノルルへと旅立っている。日本滞在は約
2週間であった。

長崎では、船上での記者会見に応じ、美しい国という第一印象と、今後の人種問題の見通しを語っている。翌朝の『東京朝日新聞』は、長崎よりの通信として、『「ニグロの父」来朝』と題し、顔写真を付して「68歳とは見えぬ若々しい容貌で元気よく語る」と報じ、以下のデュボイスの言葉を紹介して

いる。

満支を経てはじめて日本を訪問したのですが美しいお国ですね、日本の読物も随分読みました、自分の研究しているのは社会学特に種族問題です、私の考へている結論は来る世界は有色人種と白色人種の対立と云ふ事で、有色人種が経済的精神的勢力を保有した暁には世界は有色人種の支配下に置かれるであらうと云ふ事です。帰国したら何か日本に関し筆にして見たいと考えています¹⁶⁾。

その後、デュボイスは同船で神戸に向かい、3日午後には神戸に到着している。神戸ではデューク大学で学んだことのある関西学院予科教授の児玉国之進らに案内され、大阪毎日新聞、大阪朝日新聞の本社を訪れ、両社幹部らと面談している。翌日の『大阪毎日新聞』は、彼が民俗学の立場から「アイヌ族の研究」に関心がある旨や、成立したばかりの日独防共協定につき「白人も有色人種の力を借りねば大事業は出来なくなったところが、まことに愉快ではないか……」と語り、さらに以下のように言う。

欧州は今やスペインの動乱を契機として勢力が二分され第二の世界大戦が勃発するかもしれない緊迫した情勢にあるが、もし大戦が惹起するとしたらその中には民族の抗争、人種の戦争が予想される、これは地球上の人種が辿らねばならぬ宿命であらう¹⁷⁾。

第二次世界大戦とそれによって世界の人種問題がより深刻化するのを予見するかのようであった。デュボイスの忙しいスケジュールは続き、

次の日の朝、私は公式に大阪府の副知事と大阪市長に接見した。その後、私は神戸女学院で700人の女子学生に講演し教職員と昼食をとり、それから関西学院の教職員に講義をしてお茶の時間を共にした。夜には40名の校長と府教育委員会職員たちがホテルで夕食会を催してくれた。会食の席ではスピーチがおこなわれ、それに応じて私は多くの質問に答えた。ゲストのなかに4人の女性が出席していた。¹⁸⁾

と関西での行動を記している。

関西での滞在は9日までの一週間だったが、上記に見るように初日から過密な予定をこなしていった。西宮市の神戸女学院大学は、1878年（明治11年）に、フィスク大学の合唱団フィスク・ジュビリー・シンガーズが訪問し黒人霊歌を歌った学校でもある。同大学でのフレデリック・ダグラス（Frederick Douglass：1818年—1895年）に関する講演¹⁹⁾の後、同市の関西学院では「黒人文学に就いて」（同日午後）を語り、そして大阪市内のホテルで教育者との座談会（同日夕）に出席と続くのである。翌日は府と市当局による市内見学や大阪湾の湾内観光、夜には大阪毎日新聞社での演題「日本青年に与う」の公開講演を行っている。『大阪毎日新聞』が報じている予定では、奈良・京都見学の合間をぬい、京都では同志社大学をはじめ3カ所で講演を行うというスケジュールである。同志社大学での講演は「米国ニグロに関する二、三問題」というものであった。²⁰⁾ [付属資料3：図3]

12月10日、デュボイスは夜9時東京駅着の特急つばめ号に乗車した。東京では、同志社ハリス理化学校から東京帝国大学、コーネル大学で学んだ植物学者の三宅驥一東京帝国大学教授のほか、外務省や関係者の出迎えを受けて宿舎の山王ホテルに落ち着いた。翌朝の『東京日日新聞』の見出しは〈「黒人の父」入京す²¹⁾〉であった。デュボイスは17日に横浜港から龍田丸でホノル

ルに向かうまでの約一週間、関東でも精力的に行動した。東京の各新聞社や東京帝国大学訪問²²⁾をはじめ、早稲田大学および専修大学での講演、日本ペン倶楽部はじめ各種団体主催の食事会などに出席した。講演では「黒人の将来」や「アメリカ民主主義における黒人の役割」、「黒人文学」などについて話している。その合間に歌舞伎鑑賞や日光の東照宮見学などもしている。宿舎は予約していた山王ホテルに1、2泊しただけで「最上」の帝国ホテルに移るよう薦められ、そちらに移っている。帝国ホテルでは、フロントでの出来事がデュボイスを感動させている。すでにフロントにいたデュボイスを差し置いて、アメリカの白人女性が大声で先に対応するよう求めたが、日本人のフロント係は順番通りにデュボイスを丁寧に扱ってから、その女性に対応したという²³⁾。アメリカではほとんどあり得ない、こうした細かい出来事、体験の積み重ねの上に、デュボイスの親日観は強まっていったのだろう。[付属資料3：図4、図5]

なお、東京では、文芸評論家の新居格^{にいいたる}が、長文のデュボイス紹介を『読売新聞』文芸欄に2回にわたり分載している。「来朝のデュ・ボイスを迎ふ——ニグロの父としての文学者」の見出しで若き日の写真入りである。記事の（上）では、「日本ペン倶楽部でも来る十六日夜の例会に彼を招いて交歓すると決定」したが、アメリカでは著名人の彼も日本ではほとんど知られていないので、事前に紹介するという趣旨が窺える。記事はメアリー・オーヴィントン（Mary White Ovington：1865年—1951年）の『黒人・人名鑑』（*Portraits in Color*）やデュボイスの『ダークウォーター』に依拠し、家族関係や略歴を紹介したのち、彼の歴史学や社会学の著書から小説に至るまで言及している²⁴⁾。

翌日掲載の（下）では、文学者の集いを意識してか、1911年にニューヨークと首都ワシントンDCで上演された、彼の脚本による歴史劇にまつわるエ

ピソードにも触れている。さらに国際的な活動として、パン・アフリカ会議についてや、来日前年に出版され好評を博した南北戦争後の再建期を扱った歴史書『米国の黒人による再建』についても言及している。そして「……黒人の社会的地位を高めるために戦って来たデュボイス博士を迎えて日本ペンクラブが話を聴くのは、非常に意味のあることだ」と締めくくっている²⁵⁾。

12月17日、デュボイスは横浜から龍田丸でホノルルへ向かったが、デュボイスに対する日本側のもてなしには、国際文化振興会（略称 KBS）や彼に訪日を熱心に勧めた在米日本人の正田保一（1890年—1947年）などの計画や調整があった。とりわけ中心的役割をした国際文化振興会は、日本政府が国際連盟脱退後、国際文化事業および文化戦略のための機関として設立された団体であり、デュボイスを欧米の影響力ある一知識人として招いたようである。同振興会は外務省と文部省が管轄し、昭和天皇の弟の高松宮を総裁、近衛文磨を会長とし、評議員には歴代の満鉄総裁を含んでいた。それゆえに、先述したデュボイスと満鉄総裁の松岡洋右との会見も同会との関係で実現した²⁶⁾。

正田に関しては、自身の個人的ネットワークによる活動を行っている。北九州に生まれた正田は、早くに両親を亡くし、大阪に移った。そこでキリスト教に入信し、YMCA で働きつつ、関西学院の神学部で学んでいる。しかし、大学在籍中に、かねてよりアメリカでの研究生活を夢見ていた正田は、大学を中退して念願の米国行きを果たす。渡米から一年半が経ったころ、ニューヨークの黒人地区ハーレムに近いコロンビア大学に聴講生として登録し、そこで黒人社会や黒人問題に強い関心をもち始めたようである。全米黒人地位向上協会にも加入した。ハーレムに週末ごとに足を運び、黒人通の日本人として、やがてデュボイスなど著名な黒人指導者とも知己になる。1936年のデュボイスの外遊の際、訪日を強く勧め、関西学院関係者に対応を依頼することも正田が行っている。

ところが、1930年代末期に日米関係がますます悪化するにつれて、さらには正田が関わって訪日をみたデュボイスが依然として親日のままゆえか、ニューヨーク総領事館は正田に、日本の「黒人工作」、すなわちアメリカの弱点の一つは人種問題であることから、アメリカ社会の内部から黒人の親日派をつくり打撃を与えようとする仕事を依頼する。そして正田は、日米開戦後の1942年、戦時交換船（デュボイスが帰国時に乗船した船と同じ、龍田丸であった）で帰国するまでの間、黒人の動向などを外務省のために情報収集している。帰国後は、外務省の囑託として、外務省の機密文書の報告書『戦争ト黒人——日米開戦以後ノ黒人ノ動向及ソノ背景』の作成や、エメット・スコット（Emmett Scott：1873年—1957年）の『米国黒人と第一次大戦』（第1巻）の翻訳や注解などの仕事に従事している²⁷⁾。なお、正田はデュボイスの黒人論の名著とされる *The Souls of Black Folk* の日本への翻訳紹介にも強い関心をもっており、デュボイスの来日以前に米国に留学していたメソジスト教会関係者に話をもちかけている。しかし日本での訳書は戦前には完成をみなかった²⁸⁾。

帰国後デュボイスは、1937年2月から3月および9月から10月にかけて黒人紙『ピッツバーグ・クーリエ』（*Pittsburg Courier*）の「フォーラム——事実とデュボイスの意見」に、日本での「決して忘れることのできない体験」を連載している。

私は、これまでもさまざまな町や国でしばしば親切にしてもらったことがある。しかし、日本においてほど常に気配りや歓迎を示されたことはなかった。私がどのような公的な地位にもなく、ただの私的な市民として来日したこと、母国においてさえ歓迎されているとはいえないことを考えると、これはなおさら驚くべきことであつた²⁹⁾。

日本に対するデュボイスの高い評価と期待は、日本が「有色人種の利益のために、有色人種によって運営される有色人の国」であり、しかも短期間のうちに近代化を成し遂げ、日露戦争に「勝利」し、欧米列強に伍するまでになったところにある。デュボイスは自身の生年が明治維新と同じということまで意識していた。³⁰⁾ 満洲問題にしても、欧米に頼る中国より、欧米列強に挑戦する日本に理解を示すのである。有色人種間の連帯とそれにもとづく解放運動に対するデュボイスの言動は、国際社会の中で孤立していく日本政府にとっては、都合がよかったことは間違いなかった。デュボイスは日本滞在中、黒人の実情や文化について話す機会に恵まれた。その一方で、私人としてはあるが、「黒人の父」という立場を喧伝され、アメリカの人種問題の実態紹介や、アジア各地での日本の植民地主義を正当化するため政治的に招かれ、ときに利用されたと言えよう。

なお、アメリカにおける日本側の「黒人工作」がどれほど政府の政策や知識人、大衆に影響を与えたかは、もう少し検討が必要であるが、FBIをはじめアメリカ当局がその動きを警戒し、過剰なまでの反応を示しているのは、黒人による親日感情が、日本への共感に加えて、国内における黒人に対する社会的不平等の所産と認識していたからであろう。³¹⁾

ところで、日本におけるこうしたデュボイスの体験は、デュボイスより数年早い1931年のエチオピア使節団訪日の体験とかなり差がある。アフリカあるいはアフリカ系の人びとにとって、独立国のエチオピアは欧米からの支配の解放と団結、アフリカ文化の独自性のシンボルであった。エチオピアは当時、イタリアをはじめ欧米の侵略、植民地主義の脅威にさらされつつも、第一次イタリアーエチオピア戦争におけるアドワの戦い（1896年）でイタリア軍を破っていた。³²⁾ かくて独立を保ち、かつ国際連盟の加盟国でもあった。そのエチオピアもまた、アフリカとアジアの「有色人盟主」同士の結びつき

を思想的にも実利的にも求めていた。とりわけエチオピア側は、日本を近代化の重要なモデルとして注目していた。したがって、1930年に即位した皇帝ハイレ・セラシエ1世（Hayla-Sellase I：在位1930年—1974年）は、翌年に皇帝が信頼を寄せる外務大臣のヘルイ・ウォルデ＝セラシエ（Heruy Walda-Sellase：1878年—1938年）を団長とする使節団を日本に送っている。こちらは私人の身分であったデュボイスと違い、お互い国際連盟の加盟国で通商条約を結んでいる国からの使節団の公式訪問であり、国賓として皇居で昭和天皇に公式の謁見、首相官邸での若槻禮次郎首相や幣原喜重郎外務大臣との会談、主要な軍人、政治・経済界の要職者などとお話している。2カ月にわたる視察や観光であった。日本の新聞も使節団の動向を伝え、ヘルイが帰国後に出版した日本体験談は、アムハラ語から英語そして日本語に翻訳出版された³³⁾。

なお、1935年10月にイタリアがエチオピアに侵攻し、第二次イタリアーエチオピア戦争（1935年—1936年）が起こった。その際に欧米などではイタリアの軍事的行動を「第二の満洲事変」（“the Second Manchurian Incident”）などと呼ぶ声も聞かれたが、デュボイスは国際政治に関する著名かつ影響力ある雑誌『フォーリン・アフェアーズ』（*Foreign Affairs*）に文章を寄稿し、イタリアのエチオピア侵攻には人種主義が含まれ、日本の満洲での行動には人種主義が見られないと記している。日本を擁護するデュボイスの親日的態度がここでも窺えるのであった。³⁴⁾

おわりに

1936年のデュボイスの訪日と滞在経験は、来日前に抱いていたデュボイスの好意的な日本観を覆すことはなかった。デュボイスは、第二次世界大戦に向かう時期の日本滞在では、日本が見せたいものしか見ることができなかつ

た点を認識しつつ、しかし帰国後も日本の立場への理解と同情を表明し続けた。そうしたデュボイスの、階級やナショナリズムよりは人種を中心軸にした世界観は、アフリカおよびアフリカ系ディアスポラの人びとを結び付け、パン・アフリカ運動やヨーロッパ植民地下にあるアフリカ諸国の独立運動を進めるのに役立った。また、アメリカの黒人差別を国際的に知らしめ、世界の人種差別反対運動との連携の可能性も拓いた。しかし、その一方で、明らかに実情と離れた日本観さらにはアジア観も生み出した。竹本友子はデュボイスの訪日を扱った論文の結論部で次のように述べている。

デュボイスの認識の甘さや矛盾を指摘し、日本の宣伝活動に利用された彼の不明を批判するのは容易なことである。しかし、圧倒的な白人至上主義の時代に白人至上主義の国に生を享け、西欧的価値観の中で西欧流の教育を受けつつ、なお有色人種有能力や人種的独自性を主張しなければならなかったデュボイスにとって、繰り返して言うが、日本は希望の星であった。³⁵⁾

その「希望」の程度がどれほどであったかはさらなる検討が必要であるが、少なくともその後の日本は、デュボイスの期待とは逆行するように、アジアにおける西洋支配からの解放という看板や旗を掲げて、アジア各地へと侵攻を続けた。結局、有色人種による社会主義国家というデュボイスの夢を実現したのは、日本ではなく第二次大戦後の中国であった。³⁶⁾ 竹本は以下のように稿を閉じている。

デュボイスの対日観が矛盾に満ちているとするならば、それは西欧近代の歴史の根底にある人種差別主義そのものが、彼をそのような立場、す

なわち人種というものを基軸に物を考えざるをえないところまで追いやり、人種による攻撃に人種をもって対抗させようとしたのだと言えないだろうか。日本がアジアの一国としていかに振る舞うべきかということは、いまなおわれわれの課題である。われわれはデュボイスの期待に十分答えていると胸を張ることはできないであろう。³⁷⁾

デュボイスが留学したドイツは、近代西洋哲学の発展に貢献し、後世に多大な影響を与えた哲学者ヘーゲル（1770年—1831年）を生んだ国である。そのヘーゲルは、講義録『歴史哲学講義』（没後刊行）の中で、「本来のアフリカは、歴史的にさかのぼれるかぎりでは、ほかの世界との交渉をもたない閉鎖地帯です。内部にひきこもった黄金の地、子どもの国であって、歴史にめざめる以前の暗黒の夜におおわれています³⁸⁾」、「これをもってアフリカにわれわれを告げ、以後はもう話題にすることはやめにします。アフリカは世界史に属する地域ではなく、運動も発展も見られないからです³⁹⁾」と述べている。こうした言説は、当時の地理的知識の乏しさや時代的制約もあるが、アフリカを歴史のない「暗黒大陸」（“Dark Continent”）とする近代ヨーロッパのアフリカ観を象徴する言葉、アフリカ人およびアフリカ系の人びとへの偏見にもとづく言葉として知られている。

アフリカで人間を奴隷として拉致・獲得し、極めて非人道的扱いの中間航路を経て、「新大陸」アメリカで「合法」的な労働力として苛酷に扱う、大西洋奴隷貿易を正当化するイデオロギーでもあった。デュボイスが博士論文で格闘したテーマである。[付属資料3：図9]。こうした見方は、ヨーロッパひいてはアメリカなどでアフリカ系の人びとに対する人種差別を根付かせることにもなった。さらに、欧州からは「極東」に位置する日本、幕末からの近代日本にも、日本人が見習うべき西洋の文明思想として輸入された。例

えば福澤諭吉（1835年—1901年）は代表作ともいえる『文明論之概略』（1875年）で以下のように述べる。

いま、世界の文明を論ずるに、^{ヨーロッパ}欧羅巴諸国並に^{アメリカ}亜米利加の合衆国を以て最上の文明国と^なし、^{トルコ}土耳其、^{支那}支那、日本等、^{アジア}亜細亜の諸国を以て^{はんかい}半開の国と称し、^{アフリカ}アフリカ及び^{オーストラリア}オーストラリア等を目して^{やばん}野蛮の国といい、この名称を以て世界の通論となし……⁴⁰⁾

福澤によれば、日本が独立を守るためには、悪しき未開や半開の国々から脱して、文明の国の仲間入りをせねばならなかった。いわゆる「脱亜入欧」である。

デュボイスはこうしたアフリカ観やアフリカ系の人びとへの考え方に対して、学者や社会改革者として、生涯闘い続けた。アフリカであれアメリカやカリブであれ、黒人もソウルを持った人間であり、その歴史や社会、文化を「未開」と一括りにするわけにはいかない。「未開」なのは、そもそもアフリカを「暗黒大陸」と呼ぶ人たちの眼や意識のほうではないのか、とデュボイスは考えていたであろう。

デュボイスは、文字通り、自身を世界史の流れの中に置き、将来を見通し、アフリカを歴史のない大陸とする近代ヨーロッパのアフリカ観やアフリカ系の人びとへの抑圧と対峙した。パン・アフリカニズムの先駆者の一人であり、強力な推進者であった。人種や社会主義を基軸にした世界観ゆえに、あるいはその理想や期待が高いがゆえに、アフリカの多様性やアジアでの日本の立場や行動、世界情勢などを見誤ったこともある。例えば、デュボイスが「有色人種の希望」とした日本は、第二次世界大戦ではアジアに侵攻し続け、ビルマ（現・ミャンマー）と英領インドの国境域まで戦争を拡大し、その結果、

ビルマ戦線では日本軍はイギリス兵のみならず英領ゴールド・コースト（デュボイスが終の棲家とした、現・ガーナ共和国）から送られたアフリカ兵とそ⁴¹⁾の地で戦うことにもなった。[付属資料3：図10、図11]

デュボイスはアメリカの人種差別や資本主義的ナショナリズムを批判し、社会主義を評価したゆえに、アメリカの主流社会から疎外され、最終的にはアメリカ人であることを放棄するような態度をとった。「ラディカル民主主義者」⁴²⁾の黒人でもあった。それでもなお、デュボイスは一貫して、肌の色にとらわれない人種差別のない世界を希求し続けた。さらには、デュボイスにとっては、「知は力である」と同時に、「知は力でなければならない」のであった。それゆえ、最晩年になっても、人種差別との闘いの手段の一つとして、アフリカやアフリカ系の人びと（アフリカーナ）の世界に関する国際的な百科事典の編纂に携わった。それはンクルマ大統領の依頼でもあった。アフリカおよびアフリカ系の人びとに関する百科事典を編纂・刊行することの重要性を二人とも実感していた。国際的な百科事典を刊行することで、アフリカやアフリカ系の人びとの歴史や文化を示すことができるのである⁴³⁾。1963年、デュボイスは95歳でガーナで亡くなったが、その生前の著作と活動や、最後の未完の百科事典編纂などの遺志は、アメリカやアフリカのみならず、ヨーロッパ、日本を含めアジアなどでも、ときに批判も浴びつつ様々に継承され⁴⁴⁾ている。

デュボイスは1903年に刊行された『黒人のたましい』の中で、「アメリカは、神からその国土のうえに印しづけられた荒々しい壮大さ以外には、世界にほとんど美なるものをあたえなかった。この新世界においては、人間精神は美によりもむしろ力と巧妙さに発現したのである」⁴⁵⁾と述べざるを得なかった。そのアメリカでは、本稿「はじめに」で引用したように、コーネル・ウエストが、ポスト・アメリカ世界やアメリカ帝国がもはや中心にない世界に

ついでに理解を深めるのに、デュボイスがどれほど参考になるかをようやく実感し始めたと言っている。これもまた予言的な発言であり、「グローバリズム」の看板を掲げた21世紀における戦争やテロリズム、人種差別や民族差別、格差社会、文化や文明の衝突といった諸課題に対して、デュボイスの著作や活動を考察、再考察する有効性を指摘している。デュボイスはアメリカニズムとパン・アフリカニズムの狭間に立ち、世界史の流れを敏感に感じ取りながら思索しつつ行動した。W・E・B・デュボイスを研究することの現代的意義は大きい。

註

エピソード

- 1) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、5ページ。原書に関しては、筆者所蔵のW. E. B. Du Bois, *The Souls of Black Folk: Essays and Sketches*, Chicago: A. C. McClurg, 1903. およびW. E. B. Du Bois, *The Souls of Black Folk*, 1903. Eds. Henry Louis Gates Jr. and Terri Hume Oliver, New York and London: W. W. Norton and Company, 1999. (A Norton Critical Edition) を参照した。

はじめに

- 2) 本稿は筆者の研究プロジェクト「W・E・B・デュボイスの生涯と時代」に含まれる試論である。デュボイスの多彩な著作や活動、難解でありつつ抒情に溢れると言われる文章を、歴史学の立場から長年、精緻に論じてきた竹本友子氏の諸論考（「W・E・B・デュボイスと日本」〈1994年〉など）に多くの教示を得たことを、はじめに謝意とともに記しておきたい。デュボイスの活動を時代順に追った千葉則夫『W・E・B・デュボイス——人種平等獲得のための闘い』（近代文芸社、2003年）は、現時点では日本での（日本語での）唯一のデュボイス伝記本であり、こちらも参照させて頂いた。

満洲および日本とデュボイスに関して刺激的かつ緻密な論考を含む近著に、Etsuko Taketani, *The Black Pacific Narrative: Geographic Imaginings of Race and Empire between the World Wars*, Hanover, New Hampshire:

Dartmouth College Press, 2014があり、新たな資料や視座の提示も含め、今後の「ブラック・パンシフィック」研究あるいはデュボイス研究に欠かせないものとなろう。著者には、竹谷悦子「ブラック・ユーラシア——満鉄の鉄道から読むW・E・B・デュボイス」、『多民族研究』（多民族研究学会）、7号、2014年、26—36ページ、の論考もある。

筆者の既往の関連文献では、古川博巳・古川哲史『日本人とアフリカ系アメリカ人——日米関係史におけるその諸相』（明石書店、2004年）、古川哲史「アフリカ系アメリカ人と日本／東アジア——その関係史構築の意義と課題を考える」、『アメリカ史研究』（日本アメリカ史学会）第30号（特集：トランスナショナル・ヒストリー再考——国境を越える歴史叙述の可能性と課題）、2007年、83—93ページ、古川哲史「近代日本にとってのエチオピア——昭和初期における経済的関心とヘルイ使節団来日を中心に」、『大谷学報』（大谷大学大谷学会）第86巻第2号、2007年、1—17ページ、Furukawa Tetsushi. “Japan and Ethiopia in the 1920s-30s: The Rise and Fall of ‘Sentimental’ Relations.”、『人間・環境学』（京都大学大学院人間・環境学研究科）8号、1999年、135—145ページ、なども参考にした。

なお、本稿において訳者の表示のないものはすべて拙訳である。引用部分には、現在の基準で見れば「差別的表現」と思われる用語も出てくるが、当時の時代状況や社会状況の反映であり、原書に従って訳したことを御了解頂きたい。

- 3) 例えば、「デュボイスは最後はアメリカ国籍を放棄し、文字通りガーナ人、アフリカ人として亡くなった」と日本でも語られることがあるが、厳密には、デュボイスはガーナの市民権は取得したが、アメリカ国籍を放棄する機会のないまま亡くなった（David Levering Lewis, *W. E. B. Du Bois: The Fight for Equality and the American Century, 1919-1963*, New York: Henry Holt and Company, 2000, p. 569, p. 687.）。
- 4) Cornel West, *Black Prophetic Fire: In Dialogue with and Edited by Christa Buschendorf*, Boston: Beacon Press, 2014, p. 42.
- 5) デュボイスは社会学に関わる著作を多く残しながらも「忘れられた社会学者」であった。その点については、辻正二が「われわれは、デュボイスの埋もれていた業績を掘り起こし、社会的に評価しなければならない」と述べ

ている（辻正二「W・E・B・デュボイスの社会学と都市研究」『アンビバレンスの社会学——アメリカ社会学史断章』（恒星社厚生閣、2001年、182ページ）。

アメリカ文学者の小林憲二は、「後期のデュボイス、とりわけ第二次大戦後の20年間に目を向けたとき、その営為と影響力には瞠目すべきものがある。その点で、『マッカーシズム』に翻弄されていた当時の『リベラル』とは異なっている」と述べ、日本でもデュボイスの第二次世界大戦後、冷戦期の活動はもっと研究されてしかるべきと指摘している（小林憲二「冷戦期のW. E. B. デュボイス」、『アメリカ学会会報』164号、2007年、巻頭言）。

デュボイスの生涯概観

- 6) デュボイスの幼少期から青年期までの自己形成や視座を、両親の家系も含めて論じたものに、中村（笹本）雅子「環大西洋世界と W. E. B. デュボイスの自己形成——グレート・バリントンからベルリンへ」、『アメリカ史研究』（日本アメリカ史学会）、28号、2005年、38—57ページ、がある。
- 7) 主著『黒人のたましい』で知られることになる「20世紀の問題はカラー・ラインの問題である」という有名な言葉は、この会合での「世界の諸国民に向けて」と題したスピーチですでに発せられていた（W. E. B. Du Bois, *The Souls of Black Folk*, 1903. Eds. Henry Louis Gates Jr. and Terri Hume Oliver, New York and London: W. W. Norton and Company, 1999, p. 5 (fn. 1)）。なお、デュボイスは自身が主催した1919年のパン・アフリカ会議を第1回の会議としている。
- 8) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、15—16、30ページ。「日本語訳あとがき」も参照。

黒人で初めてアイビーリーグの大学（ブラウン大学、1949年）の教員になった歴史学者のジェイ・サンダース・レディング（Jay Saunders Redding）は、本書の1961年版（New York: Fawcett Publications, 1961）の解説で、「歴史に残る著作というより、歴史をつくる著作」（“*The Souls of Black Folk* is more history-making than historical.”）と評し、アーノルド・ランパサッド（Arnold Rampersad）は、「ある種の聖なる書物」（“a kind of sacred book”）となったと述べている（W. E. B. Du Bois, *The Souls of Black Folk*,

1903. Eds. Henry Louis Gates Jr. and Terri Hume Oliver, New York and London: W. W. Norton and Company, 1999, p. 296.)。

- 9) ベルリン・オリンピックに関しては、デュボイス自身はオリンピック期間中はベルリンを避けてパリなどに滞在し、距離を置いて「ヒトラーのオリンピック」を見ていたようである (Christina Oppel, "W. E. B. Du Bois, Nazi Germany, and the Black Atlantic," *GHI Bulltin Supplement*, German Historical Institute, No. 5, 2008, p. 108.)。

なお、「知の巨人」("Black Titan") と呼ばれるのがデュボイスなら、デュボイス同様に人種差別と闘い、ベルリン・オリンピックで走ることでヒトラーの「アーリア人種主義」に打撃を与えたのは、「オハイオの弾丸」("Buckeye Bullet") と言われるアメリカ黒人のジェシー・オーエンス (Jesse Owens : 1913年—1980年) であった。ベルリン五輪で100メートル走をはじめ4つの金メダルを獲得し、「ヒトラーのオリンピック」は「オーエンスのオリンピック」と呼ばれるようにもなった (ジェフ・バーリンゲーム、古川哲史・三浦誉史加・井上摩紀訳『走ることは、生きること——五輪金メダリスト ジェシー・オーエンスの物語』、晃洋書房、2016年)。

- 10) インディアナ州生まれのシャーリー・グレアムについては、ジェラルド・ホーンによる詳細な伝記がある。Gerald Horne, *Race Woman: The Lives of Shiley Graham Du Bois*, New York: New York University Press, 2000.
- 11) ガーナを独立に導いたクワメ・ンクルマの生涯に関しては、近著の砂野幸稔『ンクルマ——アフリカ統一の夢』(世界史ブックレット)、山川出版社、2015年、で簡潔にまとめられている。
- 12) Gerald Horne, *Black and Red: W. E. B. Du Bois and the Afro-American Response to the Cold War 1944-1963*, Albany: State University of New York Press, 1986, p. 356.
- 13) 『朝日新聞』、1963年8月29日付朝刊。

デュボイスの日本訪問 (1936年)

- 14) デュボイスの訪日に関しては、古川博巳・古川哲史『日本人とアフリカ系アメリカ人——日米関係史におけるその諸相』(明石書店、2004年)で論じた部分に加筆修正を施したものである。
- 15) 竹谷悦子「ブラック・ユーラシア——満鉄の鉄路から読むW・E・B・デュ

ボイス』、『多民族研究』（多民族研究学会）、7号、2014年、30ページ。

デュボイスと満鉄総裁・松岡洋右の「歴史的会談」については、1941年の松岡とスターリンとのモスクワでの極秘会談へと繋がるグローバルな視野から竹谷悦子が論じている。竹谷悦子「ブラック・ユーラシア——満鉄の鉄道から読むW・E・B・デュボイス』、『多民族研究』（多民族研究学会）、7号、2014年、26—36ページ、および Etsuko Taketani, “Chapter 5 The Manchurian Philosopher: W. E. B. Du Bois in the Eurasian Pacific,” in Etsuko Taketani, *The Black Pacific Narrative: Geographic Imaginings of Race and Empire between the World Wars*, Dartmouth College Press, 2014, pp. 148—184.

- 16) 『東京朝日新聞』、1936年12月3日付。
- 17) 『大阪毎日新聞』、1936年12月4日付。
- 18) “Forum of Fact and Opinion by W. E. B. Du Bois,” *Pittsburg Courier*, March 13, 1937.
- 19) David Levering Lewis, *W.E.B. Du Bois: The Fight for Equality and the American Century, 1919-1963*, New York: Henry Holt and Company, 2000, p.415. 『めぐみ』（神戸女学院・同窓会誌）、30号、1937年7月、8ページ。
- 20) 『大阪毎日新聞』、1936年12月4日付。
- 21) 『東京日日新聞』、1936年12月11日付。
- 22) デュボイスはおそらく東京帝国大学での講演を望んでいたと思われるが、大学側では講演の設定はなく、当日（12月15日午前）は、施設見学と大学総長を交えた昼食会となったようである（東京大学文書館資料：S0001/Mo203文部往復（二）、昭和11年、および『帝国新聞』、1936年11月30日付）。
同日午後には早稲田大学で講演「黒人の将来」が予定され（『早稲田大学新聞』、1936年12月9日付）、翌16日には専修大学で南洋事情研究会の主催で「黒人ノ将来」と題した講演を講堂でおこなった（『経済法律論叢』第8巻第1号、1937年、209ページ）。なお、専修大学ではデュボイス講演の写真が、卒業アルバム『専修大学専門部卒業記念』（昭和11年度）（駿河台写真館、1937年3月、ページ数無し）に掲載されている。
- 23) David Levering Lewis, *W.E.B. Du Bois: The Fight for Equality and the American Century, 1919-1963*, New York: Henry Holt and Company, 2000,

p.417.

- 24) 『読売新聞』、1936年12月11日付、「文芸」欄。
- 25) 『読売新聞』、1936年12月12日付、「文芸」欄。
- 26) 竹谷悦子「ブラック・ユーラシア——満鉄の鉄路から読むW・E・B・デュボイス」、『多民族研究』（多民族研究学会）、7号、2014年、27—28ページ。
Etsuko Taketani, *The Black Pacific Narrative: Geographic Imaginings of Race and Empire between the World Wars*, Hanover, New Hampshire: Dartmouth College Press, 2014, p. 155.
- 27) 『戦争と黒人——日米開戦以後ノ黒人ノ動向及ソノ背景』（調六調書第25号）、外務省調査部第6課、1942年10月。エメト・J・スコット（疋田保一訳・注解）『米国黒人ト第一次大戦』（第1巻）、外務省調査局第3課、1943年2月。外務省外交史料館・史料（I/4/6/0/1-3）
- 28) 第二次世界大戦前に、『黒人のたましい』（*The Souls of Black Folk*）の仏語訳を読み感銘を受けた日本人学究がいた。日本の民俗学を樹立したといわれる柳田國男（1875年—1962年）である。1922年（大正11年）12月、柳田は国際連盟委員としてジュネーヴに滞在していた時、「ローザンヌの町に行ったら私は、*L'Âme Nègre* [黒人のたましい] といふ小さな本を買ひました」と友人への手紙に記している。当時、柳田は人種問題の世界的重要性に気づいていた数少ない日本人の一人であった（「書簡」、『定本 柳田國男集 別巻第四』、筑摩書房、1964年、473ページ）。
なお、『黒人のたましい』の日本語訳が出版されるのは、アメリカの公民権運動期の1965年である [付属資料2]。
- 29) “Forum of Fact and Opinion by W. E. B. Du Bois,” *Pittsburg Courier*, March 13, 1937. 竹本友子「W・E・B・デュボイスと日本」、『史苑』54巻2号、1994年、81ページ。
- 30) W. E. Du Bois, *The Autobiography of W. E. B. Du Bois: A Soliloquy on Viewing My Life from Last Decade of Its First Century*, New York: International Publishers, 1968, p. 100.
- 31) 竹本友子「アメリカ黒人と日本——両大戦間期における黒人の親日感情と日本の宣伝工作を中心として」、『ヨーロッパの市民と自由——その歴史的諸相の解明』（早稲田大学アジア太平洋研究センター）、研究シリーズ42号、1999

年、272—273ページ。

- 32) 非西欧の「有色人」国家による西欧の白人国を戦争で破った例として、しばしば日露戦争の日本の勝利（1905年）が言及されるが、時期的には、第一次イタリア—エチオピア戦争でのエチオピアの勝利（1896年）の方が早い。
- 33) ベラチン・ギエタ・ヘルイ（オレストエ・ヴァカーリ英語訳、エンコ・ヴァカーリ日本語訳）『大日本』、英文法通論、1934年。日本滞在の体験談を主としたこの原書タイトルはアムハラ語で *Mahdara Berhan Hagara Japan* 『光の源、日本国』であり、ヘルイの日本で受けた印象が表れている。
- エチオピア使節団来日を含む1920年代から30年代の日本—エチオピア交渉史については、古川哲史「近代日本にとってのエチオピア——昭和初期における経済的関心とヘルイ使節団来日を中心に」、『大谷学報』（大谷大学 大谷学会）、第86巻第2号、2007年、1—17ページ、Furukawa Tetsushi. “Japan and Ethiopia in the 1920s-30s: The Rise and Fall of ‘Sentimental’ Relations.” 『人間・環境学』（京都大学大学院人間・環境学研究科）、8号、1999年、135—145ページ、など。
- 34) W. E. B. Du Bois, “Inter-Racial Implications of the Ethiopian Crisis: A Negro View,” *Foreign Affairs*, Vol. 14, No. 1, 1935, pp. 82-92.

おわりに

- 35) 竹本友子「W・E・B・デュボイスと日本」、『史苑』、54巻2号、1994年、93ページ。
- 36) 竹本友子「W・E・B・デュボイスと日本」、『史苑』、54巻2号、1994年、89ページ。
- 37) 竹本友子「W・E・B・デュボイスと日本」、『史苑』、54巻2号、1994年、93—94ページ。
- 38) ヘーゲル（長谷川宏訳）『歴史哲学講義』（上）、岩波書店（岩波文庫）、1992年、157ページ。
- 39) ヘーゲル（長谷川宏訳）『歴史哲学講義』（上）、岩波書店（岩波文庫）、1992年、169ページ。
- 40) 福澤諭吉『文明論之概略』、岩波書店（岩波文庫）、1995年、25ページ。
- 41) 第二次世界大戦における日本軍とアフリカ兵およびアフリカ系アメリカ兵の戦線での接触や人種関係は、日本側の史料が乏しいだけに、国際的に調査さ

れるべき課題である。ガーナ内陸部の都市クマシの軍事博物館には、日本軍の兵士たちが所持していた日章旗をはじめ、軽機関銃、ピストルなどが展示されている。英領ゴールド・コースト（現・ガーナ）兵士たちに持ち帰られた日本軍関連の「戦利品」（それはまた「遺品」でもあろう）の存在については、明治大学の溝辺泰雄先生の御教示による。深く感謝したい。

日本軍とアフリカ系アメリカ人兵士については、筆者も以前、小論を発表したことがある。古川哲史「第二次世界大戦での日本人とアフリカ系アメリカ人——その「出会い」と「衝突」をめぐる」、『黒人研究』71号、2001年、20—24ページ。

- 42) Manning Marable, *W. E. B. Du Bois: Black Radical Democrat*, New York: Twayne Publishers, 1986. (New Updated Edition, 2005)
- 43) アフリカで Encyclopaedia Africana Project として全20巻の計画で刊行が始まった *The Encyclopaedia Africana: Dictionary of African Biography*. Algonac, Michigan: Reference Publications は、現在、Vol.1 (1977), Vol.2 (1979), Vol.3 (1995) の3巻で留まっている。
- 44) デュボイスが百科事典の批判的モデルとしたのは、*Encyclopaedia Britannica* であった。その遺志を継いで刊行された成果の一つが、ハーバード大学デュボイス研究所所長のヘンリー・ルイス・ゲイツ・ジュニアと同僚のクワメ・アンソニー・アッピアが共編として出した大部な1巻本 Kwame Anthony Appiah and Henry Louis Gates, Jr. eds. *Africana: The Encyclopedia of the African and African American Experience*, New York: Basic Civitas, 1999. であった。400人以上の学者が項目執筆に関わって完成された。ただし、アフリカ系アメリカ関連項目に偏り、事実関係の誤謬（とくにアフリカや宗教関連の項目）もあり、批判も出た（落合明子「悲願の百科事典『アフリカーナ』——知の体系に挑む黒人知識人の伝統」、明石紀雄監修『21世紀アメリカ社会を知るための67章』、明石書店、2002年、94—98ページ）。

それゆえ、2005年に第2版が全5巻本として大幅に増補改訂されオックスフォード出版会から刊行された。アジアに関わる項目も設けられたが、筆者が担当した一つだけであり、それも「アフリカ系の黒人とアジア人の関係を古代から現在までを概観」という、文字の分量枠に比べてあまりに抽象

的で大きすぎるテーマであった。Furukawa Tetsushi, "Black-Asian Relations," in Kwame Anthony Appiah and Henry Louis Gates, Jr. eds. *Africana: The Encyclopedia of the African and African American Experience*, 2nd edition, New York: Oxford University Press, Vol. 1, 2005, pp. 479-480. アジアとの関わりに関する項目はもっと必要であろう。

デュボイス研究に関しては、千葉則夫が註2に挙げた著書（2003年）の「あとがき」の中で、「1986年はデュボイス研究にとっては画期的な年であった」として、同年に刊行されたジェラルド・ホーン（Gerald Horne, *Black and Red: W. E. B. Du Bois and the Afro-American Response to the Cold War 1944-1963*, Albany: State University of New York Press, 1986）とマニング・マラブル（Manning Marable, *W. E. B. Du Bois: Black Radical Democrat*, New York: Twayne Publishers, 1986）の著書を挙げ、米ソの冷戦構造が終わり、デュボイスの後半期とくに社会主義的な晩年について、ようやく冷静に、公正に評価されるようになったと述べている。そして、その後堰を切ったように研究書が出版され、ピューリッツァ賞（伝記・自伝部門）を各巻ともに受賞したデイヴィッド・レヴェリング・ルイスの2巻本の伝記（David Levering Lewis, *W. E. B. Du Bois: Biography of a Race, 1868-1919*, New York: Henry Holt and Company, 1993. および David Levering Lewis, *W. E. B. Du Bois: The Fight for Equality and the American Century, 1919-1963*, New York: Henry Holt and Company, 2000.）へと繋がる流れに言及している（245-246ページ）。

2005年には、デュボイスのアジアに関する記述を集めた Bill V. Mullen and Cathryn eds. *W. E. B. Du Bois on Asia: Crossing the World Color Line*, University of Mississippi Press. なども刊行されている。なお、本稿の筆者も、デュボイス訪日のより詳細な検討や、デュボイスの人種観や日本観、アジア観の議論など別稿を準備中である。

- 45) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、345ページ。

付属資料1：デュボイスの主要著作（単行本、刊行年順）

The Suppression of the African Slave-Trade to the United States of America, 1638-1870. (Harvard Historical Studies Series, No. 1), New York: Longmans, Green, and Co., 1896.

The Philadelphia Negro: A Social Study, Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1899.

The Souls of Black Folk: Essays and Sketches, Chicago: A. C. McClurg, 1903.

John Brown, Philadelphia: George W. Jacobs, 1909.

The Quest of the Silver Fleece: A Novel, Chicago: A. C. McClurg, 1911.

The Negro, New York: Henry Holt, 1915.

Darkwater: Voices from within the Veil, New York: Harcourt, Brace, and Howe, 1920.

The Gift of Black Folk: Negroes in the Making of America, Boston: Stratford Co., 1924.

Dark Princess: A Romance, New York: Harcourt, Brace, 1928.

Africa, Its Geography, People and Products, Girard, Kansas: Haldeman-Julius Publications, 1930.

Africa: Its Place in Modern History, Girard, Kansas: Haldeman-Julius Publications, 1930.

Black Reconstruction in America: An Essay toward a History of the Part Which Black Folk Played in the Attempt to Reconstruct Democracy in America, 1860-1880. New York: Harcourt, Brace, 1935.

Black Folk Then and Now: An Essay in the History and Sociology of the Negro Race, New York: Henry Holt, 1939.

Dusk of Dawn: An Essay toward an Autobiography of a Race Concept, New York: Harcourt, Brace, 1940.

Color and Democracy: Colonies and Peace, New York: Harcourt, Brace, 1945.

Encyclopedia of the Negro: Preparatory Volume with Reference Lists and Reports (with Guy B. Johnson), New York: Phelps-Stokes Fund, 1945.

The World and Africa: An Inquiry into the Part Which Africa Has Played in

- World History*, New York: Viking, 1947.
- In Battle for Peace: The Story of My 83rd Birthday, with Comment by Shirley Graham*, New York: Masses & Mainstream, 1952.
- The Black Flame: A Trilogy*, New York: Mainstream, 1957-1961.
- The Ordeal of Mansart*, 1957.
- Mansart Builds a School*, 1959.
- Worlds of Color*, 1961.
- An ABC of Color: Selections from Over a Half Century of the Writings of W. E. B. Du Bois*, Berlin: Seven Seas Publishers, 1963.
- The Autobiography of W. E. B. Du Bois: A Soliloquy on Viewing My Life from the Last Decade of its First Century*, edited by Herbert Aptheker, New York: International Publishers, 1968. (没後刊行)

付属資料2：デュボイス著作の日本語翻訳書（刊行年順）

デュ・ボア（山室静訳）「黒い王女」、『尖端短篇集 附 黒人文学集』（アメリカ尖端文学叢書）、新潮社、1930年、432—448ページ。

（原著は、W. E. B. Du Bois. *Dark Princess: A Romance*, New York: Harcourt Brace, 1928.）

* 訳書は抄訳である。アメリカ黒人文学紹介の一部として翻訳された。訳者は詩人で翻訳家、日本女子大学教授。

W・E・バーガート・デュボア（井上英三訳）『黒人論』、博文館、1944年、総287ページ。

（原著は、W. E. B. Du Bois. *The Negro*, New York: Henry Holt, 1915.）

* 訳者は早稲田大学のフランス文学者で翻訳家でもある。訳者後記（283—287ページ）によれば、アメリカの黒人作家の詩や小説を読んで感銘を受け、その背景にある歴史への関心、理解の必要性から本書を翻訳したようである。日米が戦争中の1944年9月に初版3000部で刊行されている。

W・E・B・デュボイス（木島始抄訳）「黒人解放への二十年——デュボイス博士自傳（上）」、『部落』（部落問題研究所）、27号、1951年、28—31ページ。

（原著は、W. E. B. Du Bois. *Dusk of Dawn: An Essay toward an Autobiography of a Race Concept*, New York: Harcourt Brace, 1940.）

* 訳書は抄訳である。訳者の木島始は詩人で翻訳家、法政大学教授。ラングストン・ヒューズの詩をはじめ、数多くの黒人文学の紹介や研究に携わった。第二次世界大戦後の日本におけるアメリカ黒人研究（Black Studies / African American Studies）の先駆者の一人。

W・E・B・デュボイス（木島始抄訳）「黒人解放への二十年——デュボイス博士自傳（Ⅱ）」、『部落』（部落問題研究所）、29号、1952年、38—40ページ。

W・E・B・デュボイス（木島始抄訳）「黒人解放への二十年——デュボイス博士自傳（Ⅲ）」、『部落』（部落問題研究所）、30号、1952年、32—36ページ。

W・E・B・デュボイス（木島始抄訳）「黒人解放への二十年——デュボイス博士自傳（Ⅳ）」、『部落』（部落問題研究所）、32号、1952年、48—51ページ。

W・E・B・デュボイス（木島始抄訳）「黒人解放への二十年——デュボイス博士自傳（Ⅳ）」、『部落』（部落問題研究所）、33号、1952年、37—41ページ。

* 目次および本文タイトル中の「Ⅳ」は「Ⅴ」の誤記。

- W・E・B・デュボイス（木島始抄訳）「黒人解放への二十年——デュボイス博士自傳（6）」、『部落』（部落問題研究所）、34号、1952年、39—42ページ。
- W・E・B・デュボイス（木島始抄訳）「黒人解放への二十年——デュボイス博士自傳（完）」、『部落』（部落問題研究所）、36号、1952年、28—43ページ。
- W・E・B・デュボア（木島始訳）「アトランタ連禱——1906年、虐殺の日、アトランタにて」、111—120ページ、（木島始訳）「国土をみつめよ」、121—131ページ。ラングストン・ヒューズ編（木島始訳）『ことごとくの聲あげて歌え』、未来社、1952年。
- W・E・B・デュボア（飛田茂雄訳）「権利・義務に関するナイアガラ宣言」27—33ページ、（木島始訳）「思想革命」65—109ページ、（木島始訳）「哀しみの歌」273—290ページ。橋本福夫・浜本武雄編『ニグロ・エッセイ集』（黒人文学全集・第11巻）早川書房、1962年。
- W・E・B・デュボア（木島始訳）「アトランタ連禱——1906年、虐殺の日、アトランタにて」、木島始・皆河宗一編『詩・民謡・民話』（黒人文学全集・第12巻）、早川書房、1962年、14—20ページ。
- W・E・B・デュボア（鮫島重俊訳）「進歩の意味について」、『20世紀文学』（南雲堂）、第1号、1964年、83—95ページ。
- W・E・B・デュボア（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、未来社、1965年、総392ページ。
- （原著は、W. E. B. Du Bois, *The Souls of Black Folk: Essays and Sketches*, Chicago: A. C. McClurg, 1903. Jubilee Edition は New York: Blue Heron Press, 1953)
- * デュボイスの主著とされる本書 *The Souls of Black Folk* は、版によっては副題 *Essays and Sketches* がないものもある。1965年刊行の翻訳書は、ジュビリー版（50周年記念版）にもとづいており、デュボイス自身による3ページのエッセイ「50年後」、巻末には妻シャーリー・グレアムによる4ページの「解説」がある。訳者3人は、全員1928年生まれで、東京大学英文科卒業生であった。木島始は法政大学教授、鮫島重俊は後に應義塾大学教授となり、日本の植民地下の朝鮮半島出身の黄寅秀は、後に法政大学教授となった。
- W・E・B・デュボア（高橋徹訳）「アメリカ合衆国とニグロ人民」、18—33ページ。

（鮫島重俊訳）「この国土を見つめよ」34—43ページ。黒人研究会編『アメリカ黒人解放運動——新しいニグロ群像』、未来社、1966年。

W・E・B・デュボア（木島始・黄寅秀訳）「ジョーンの帰還」、木島始編『黒人と暴力』（全集・現代世界文学の発見10）、学芸書林、1969年、35—53ページ。

W・E・B・デュボイス（小林信次郎訳）「スエズ」、「ガーナは招く」、小林信次郎「黒い巨人の投影図——W・E・B・デュボイスのアフリカ誌抄」、『黒人研究』（黒人研究会）、42号、1971年、9—11ページ。

W・E・B・デュボイス「気違い沙汰」、赤松光雄訳『黒人作家短篇集』、新潮社、1974年、7—10ページ。

W・E・B・デュボイス（砂田一郎訳）「ブッカー・T・ワシントン氏とその仲間について」、猿谷要解説・山形正男、他訳『黒人論集』（アメリカ古典文庫19）、研究社、1975年、178—193ページ。

『フリーダムウェイズ』編（小林信次郎訳）『黒い巨人——W・E・B・デュボイス』、山口書店、1988年、総iv + 478 + vページ。

（原著は、John Henrik Clarke, Esther Jackson, Ernest Kaiser, J. H. O'Dell eds. *Black Titan: W. E. B. Du Bois, An Anthology by the Editors of Freedomways*, Boston: Beacon Press, 1970.）

*デュボイス自身の著述「クリード」「開会のことば——『アフリカ大百科事典』編纂会議」などを含む。

W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、総429ページ。

*1965年刊行の未来社版の改訂版。デュボイス自身によるエッセイ「50年後」や巻末のシャーリー・グレハムによる「解説」などは省かれている。「訳者あとがき」等も加筆や修正が見られる。

W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、未来社、2006年、総392ページ。

*1965年刊行の未来社版の新装復刊版。「デュボア」の表記を「デュボイス」とするなど修正あり。

W・E・B・デュボイス（荒このみ訳）「世界の国々へ」、荒このみ編訳『アメリカの黒人演説集 キング・マルコムX・モリスン他』、岩波書店（岩波文庫）、2008年、211—217ページ。

- * 1900年のロンドンでのパン・アフリカ会議でのデュボイスの演説 “To the Nations of the World” (1900) の翻訳。

付属資料3：デュボイス関連図版



図1：W・E・B・デュボイス、39歳（1907年）。ナイアガラ運動の時期である。
(W. E. B. Du Bois, Boston, 1907. *W. E. B. Du Bois Papers* (MS 312). Special Collections and University Archives, University of Massachusetts Amherst Libraries)



図2：ドイツ滞在中のデュボイスが12月に来日する旨を報じている。
(『東京朝日新聞』、1936年8月13日付朝刊)



図3：デュボイスと同志社大学の国際関係クラブの学生および関連教員。デュボイスは2列目右から5人目、中央。(1936年12月)
(W. E. B. Du Bois with Doshisha International Relations Club, 1936. *W. E. B. Du Bois Papers* (MS 312). Special Collections and University Archives, University of Massachusetts Amherst Libraries)



図4：東京におけるデュボイスと日本の学者たち。デュボイスは前列中央。(1936年12月)
(W. E. B. Du Bois with Japanese professors in Tokyo, 1936. *W. E. B. Du Bois Papers* (MS 312). Special Collections and University Archives, University of Massachusetts Amherst Libraries)



図5：東京での歓迎の夕食会。デュボイスは女性2人に挟まれて中央。(1936年12月)
(W. E. B. Du Bois in Japan, 1936. *W. E. B. Du Bois Papers (MS 312)*. Special Collections and University Archives, University of Massachusetts Amherst Libraries)



図6：デュボイス（右）と中華人民共和国・国家主席の毛沢東。1959年4月中国訪問時。
(W. E. B. Du Bois with Mao Tse-tung in a garden, Lake Country, Central China, April 1959. *W. E. B. Du Bois Papers (MS 312)*. Special Collections and University Archives, University of Massachusetts Amherst Libraries)



図7：デュボイス（中央）95歳の誕生日。ガーナの大統領ンクルマ夫妻が首都アクラのデュボイス宅（図8）を訪れて祝う。（1963年2月）

（W. E. B. Du Bois on his 95th birthday toasting Kwame Nkrumah and Madame Nkrumah, 95th Birthday celebration, Accra, Ghana, February 23, 1963. *W. E. B. Du Bois Papers* (MS 312). Special Collections and University Archives, University of Massachusetts Amherst Libraries.）



図8：ガーナの首都アクラにあるデュボイス最晩年の自宅。現在は記念館 The W. E. B. Du Bois Memorial Centre for Pan-African Culture（1985年開設）となっている。（筆者撮影、2017年1月14日）



図9：ガーナの港町エルミナに残る奴隷貿易の拠点になったエルミナ城／要塞。

ガーナには豊富な金鉱山があり、1482年にポルトガル人が金や象牙貿易の拠点として建造した。後にオランダ、次いでイギリスが支配し、大西洋奴隷貿易における奴隷積み出しの拠点の一つとなった。400年余り続いた大西洋奴隷貿易は、約1300万人とも言われるアフリカ人をこうした要塞に「保管」し、大西洋の「中間航路」を経て「新大陸」へと運んだ。広島原爆ドーム、ナチ政権によるアウシュビッツ強制収容所などとともに、ユネスコの『『負の』世界遺産』として知られる。内部も見学できる。（筆者撮影、2017年1月16日）



図10：ガーナの内地都市クマシの軍事博物館（Ghana Armed Forces Museum）に展示されている日章旗の一つ。

第二次世界大戦ではヨーロッパの植民地から多くの兵士が戦場へと送られた（日本の植民地政策も同様である）。この日章旗はイギリス領ゴールドコースト（現ガーナ）の部隊が1944年のビルマ戦線から持ち帰ったもの。ガーナにおける「戦利品」（あるいは「遺品」）の存在については明治大学の溝辺泰雄先生から御教示を得た。（筆者撮影、2017年1月18日）



図11：クマシの軍事博物館に展示の「日本軍の南部式軽機関銃 口径6.5ミリ銃」。

南部式とは、日本陸軍の技術将校で武器製作に携わった南部麒次郎にちなむ。(筆者撮影、2017年1月18日)

謝辞：

本稿の執筆は、大谷大学から2016年度の在外研究期間を与えられ、明治学院大学国際学部付属研究所に研究員として受け入れて頂いたことで可能になりました(ガーナおよびイギリスでの調査を含む)。両大学および関係の方々にお礼申し上げます。とりわけ、明治学院大学で自由な時間を与えて頂いた受入れ教員の前所長・森あおい先生、現所長の高橋源一郎先生に感謝いたします。

〈キーワード〉 世界史、日米関係、人種問題